



第20号 2018年8月2日発行
五ヶ瀬川の壘堤を守る会

西日本豪雨で被災された方々に心からお悔やみを申し上げます。

二〇一七年度の「壘堤を守る会」の活動を振り返ってみたいと思います。春と秋の壘堤ピクニックは、壘堤周辺の除草作業を行い、壘堤沿いのウオーク、気持ち良い汗を流し、船倉公園の木陰において、みんなで食べた美味しいお弁当は忘れがたいものでした。

次に、「延岡市防災フェスタ」は、毎年、消防本部の駐車場を会場に、国、

県、市の防災関係機関や多くのボランティア団体、企業等も参加する盛大なイベントです。

二〇一七年も当会は二テントを確保し、土木遺産や石像関係などの写真を展示し、壘堤DVDをエンドレスで流すなど、啓発活動に努めました。

また、今回初めての試みだったのですが、風雨の中で壘堤に壘を差し込む等身大の石像(北町設置)をA4の普通紙にぬり絵化しⅡ写真Ⅱ、参

加した子どもたちに色鉛筆やクレヨンで塗ってもらい、完成した作品を会場内に展示しました。参加者が多く、子どもたちの喜ぶ笑顔が印象的で勇気と元気をもらいました。一方、子どもたちに、

「壘」を書いたハッピを着てもらい「実物大の壘堤に壘を入れる作業」を体験してもらいました。その姿を両親は頼もしそうにスマホで写真を撮っていました。その子どもを愛おしむ姿を見ていると、将来消防士をめざす子どもが増えていくだろうと確信した次第です。

八月四日(金)の橋の日は午前五時半に北町の石像のあるモニュメント前に集合し、その周辺を清掃、その後安賀多橋下で橋の日のイベントの人々と合流し、川への神事や清掃に参加いたしました。

橋の日の参加者は年々増え、全国的に広がっているとのことでした。

豪雨災害の頻発に思う 今こそ壘堤の活用を

ボランティア団体「萌ぎの会」の方に読み聞かせをしていただきました。

たくさん親と子が興味深く紙芝居を聴いてくださり、大好評でした。グループごとに紙芝居を何回も読み聞かせ

てくださいました「萌ぎの会」の皆様は心からお礼を申し上げます。有難うございました。

壘堤は大事な土木遺産です。最近では異常気象により集中豪雨が発生し川の氾濫が様々な地域で起こっています。減災、防災としてモバイルレビィ(可搬式特殊堤防)も評価されている今こそ、実際に壘堤の活用を考える必要があるのではないかと思います。

今年も皆様と一緒に壘堤を守っていきますのでご協力ご支援をお願い申し上げます。

会長 木原 万里子

全国の水防関係者に豊堤を紹介

延岡のPRもしつかり

全国水防管理団体連合会（協雅文会長）の「平成三十三年度全国水防大会」が四月二十六日、東京都千代田区の砂防会館で開かれ、当会上田耕市副会長が、全国の水防関係者を前に意見発表しました。

同連合会は都道府県と全国の水防管理団体で組織されており、大会は年一回、水防功労者の表彰や前年度に国内で発生した災害の情報共有などを目的に開かれています。外部からの発表者は当会のみ。



全国の水防関係者が一堂に集った会場（写真上）で発表した上田副会長



国内で発生した災害の情報共有などを目的に開かれています。外部からの発表者は当会のみ。

国交省延岡河川国道事務所からの推薦で発表を依頼されました。

石井啓一国土交通大臣も臨席してのセレモニーの後、消防団や消防団員対象の水防功労者表彰があり、表彰を受けた鳥取市消防団が体験談を話した後、上田副会長が登壇しました。

タイトルは「未来につなぐ『豊堤』の教え」。国交省延岡河川国道事務所の方が、五ヶ瀬川に豊堤が造られた理由、豊堤の仕組み、当会の活動内容などについて分かりやすく

く作動せず五分超過したものの、関心を持って聴いてくれていることが、上田副会長にも伝わってきたそうです。

「当時の人々が、豊で自分たちの町を守るということを考えて実現したこと素晴らしさ、現在もそれが残っていること、先人が残したものの上に私たちの暮らしがあることなどを話しました。豊堤だけでなく延岡という町全体についてもしつかりアピールできたと思います」と上田副会長。

大会はその後、減少している水防団員の確保対策として手当の増額など具体的な措置を講じる、水害危険性の周知の取り組みを促進するための技術的・財政的支援などを国会や政府に要望することを決議して閉会となりました。

□ □ □

十五分間という時間制限がある中、最初は機械がうまく

豊堤清掃、維持活動

豊堤周辺の除草や清掃活動は、二〇一七年度は、四月二十九日と十月二十三日の「豊堤ピクニック」、八月四日の橋の日、八月二十七日の県下一斉ボランティアの日に行いました。右の写真は今年七月十六日、京都大学防災研究所の中川一所长らリバーテックノ研究所の方々が八月三日に視察に来られるのを前に行ったものです。



2. 自助・共助の精神と畳堤

(1)「畳堤」が伝える「自助・共助」の精神

- ・「畳堤」が造られた当時は、一般住宅は五八間(江戸間)の畳を使用。
- ・一方、当時のお寺や旅館等では、もっと大きな畳(長さ186cm)を使用。
- ・五ヶ瀬川の「畳堤」は、一般住宅で使用する、五八間(江戸間)の畳の大きさにピッタリ合うように造られていました。

つまり・・・

➡ 当時は、住民自ら我が家の畳を持ち出して洪水を防いでいた！
住民の知恵と工夫で自分たちの街を守っていた！



住民による畳堤竣工式のときの記念写真(提供: 甲斐正人さん)

(参考: 畳の規格と名称)

名称	長さ	幅
五八間(江戸間)	5.8 R 176 cm	2.9 R 88 cm
三六間(中京間)	6.0 R 182 cm	3.0 R 91 cm
六一間(中京間)	6.1 R 185 cm	3.05 R 92 cm
本間(京間、関西間)	6.3 R 191 cm	3.15 R 95 cm

※1 R: 30.3 cm

「畳堤」は住民一人ひとりの「自助・共助」の精神を
今に伝える貴重な施設

- ・昔の五ヶ瀬川、大瀬川の両川の「畳堤」は、総延長が2,000m。
- ・全ての「畳堤」に畳をはめ込んだとしたら約1,000枚の畳が必要でした。
- ⇒ 6畳間で換算すると、約166部屋分です！

●現代に生きる我々の使命として・・・

- ・「畳堤」を地域防災のシンボルとして守り、保存する
- ・洪水の被害から街を守ろうとした昔の人々の知恵や工夫を見直す
- ・「畳堤」に込められた「自助・共助」の精神を広く伝える

3

(2)「自助・共助」の精神を未来につなぐ

①「畳堤」を地域防災のシンボルとして守り、保存する活動

- ・定期的に清掃活動を行い、地域防災のシンボル「畳堤」を日常的に見学し、触れられる環境づくりを行っています。
- ・活動が実を結び、「畳堤」の保存・活用のための「畳堤プロジェクト」が始動し、畳堤散策路が整備されました。
- ・100年先の後世に「畳堤」の教えを伝えるために、多くの市民の寄付によって「畳堤」の石像が設置されました。



畳堤美化のための清掃活動



「畳堤」の保存と活用の取組み(畳堤プロジェクト)



畳堤を100年後の未来に伝える石像の設置



「畳堤」を日常的に見学し、触れられる環境づくり



「畳堤プロジェクト」完成(延岡城をイメージ)



多くの観光客や散策利用者が見学に来ます

4

4. 水防活動の原点 河口開削と畳堤

- ・大瀬川の河口部には砂浜(毛なし浜)が発達し、河口を閉塞させていました。このため、豪雨時には河川水をさらに上昇させ、常に市街部は浸水の危険がありました。
- ・このため、豪雨のたびに地域の消防組(水防団)が河口部を開削してました。河口開削の作業には相当な危険があり、作業中に流され命を失う人がいたとも言われ、まさに命がけの作業でした。
- ・畳堤は、大瀬川の河口部が開削されるまでの僅かな時間のあいだ、市街部を洪水から守るために考案された施設と考えられています。
- ・畳堤と当時の消防組による河口開削は、地域による水防活動の原点であり、語り継ぐべき先人の知恵です。



消防組による「毛なし浜」の開削の様子(昭和32年)



河口部の「毛なし浜」は市道として利用されていた(昭和30年代撮影)



現在の大瀬川河口部の様子(平成22年撮影)

8

5. 未来につなぐ「畳堤」の教え

●高校生から中学生に、「畳堤」を通じた防災のリレー

- ・「畳堤」を巡る取組みが、近年、実を結びつつあります。「畳堤」を学んだ子どもたち自身が、防災意識を高める活動を展開しはじめています。
- ・延岡工業高校土木科の生徒が「畳堤」を研究し、その研究成果の発表 ※ や、近隣中学校に「畳堤」の出前授業を行うようになりました。
(※高校生らは、第16回九州「川」のワークショップin遠賀川 でグランプリを受賞)
- ・高校生から「畳堤」の教えを学んだ岡富中学校では、体育大会に「畳」を使った新競技を導入し、畳を持って運動場を全力疾走しています。
- ・その他にも、岡富小学校では「畳堤」が遠足コースになったり、小中学校では「畳堤」を題材とした防災教育が展開されるなど、地域一体となって「畳堤」を用いた防災意識を高める活動が行われるようになりました。
- ・「畳堤」に込められた「自助・共助」の教えが着実に受け継がれています。



「第16回九州「川」のワークショップin遠賀川」で発表する高校生



中学校の体育大会に導入された新競技「まちを守れ！畳堤」



中学校での「畳堤」を題材とした防災教育の展開

9

「畳で街を守る」改訂中

や校定作業に当会も協力しました。間もなく発行予定とのことです。

国交省延岡河川国道事務所、

北町区、当会の3者で企画編集

し、国交省が平成十五年に発行した畳堤紹介冊子「畳で街を守る」は現在、第2版の発行準備が進んでいます。新情報の追加

畳堤のインフラカードを発行

国交省

とにかく集めることが好き！という人の間で今、「インフラカード」が人気だそうです。全国の公共機関が、その地域の橋、道路、ダム、マンホールなどの写真と解説文を印刷して発行しているカードです。



国交省九州地方整備局も六十五施設のカードを発行し、その一つに畳堤が採用されました。写真上。延岡河川国道事務所、同延岡出張所、リバーパル五ヶ瀬川で配布しているそうです。

インフラカードの本来の目的はその施設の周知ですが、観光振興の一助になっているようです。コレクターがカードをゲットするために延岡に来て、畳堤に足を運んでくれることが期待されます。



防災フェスタに参加
市防災フェスタで当会が行った紙芝居と畳入れの様子です。詳しくは表紙の会長あいさつをごらんください。



(編集後記) 西日本豪雨は、200人以上もの命を奪う大災害となりました。

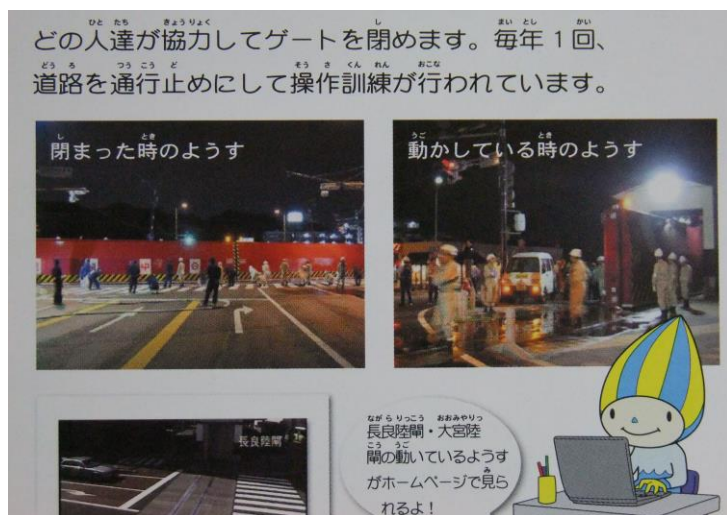
気象庁の統計によると、期間中の48時間で降水量が最も多かったのは、高知県馬路村魚梁瀬(やなせ)の1025mmですが、ここはもともと雨の多い地域で、2011年7月には1日に851.5mmが降った記録があります。年間降水量の平年値は4107.9mmで、延岡(2292.1mm)の1.8倍です。

一方、岡山県倉敷市の最大48時間降水量は270.5mmと、延岡市民から見ると少ない印象ですが、倉敷市にとっては観測史上最大でした。平成の大合併で倉敷市となった真備町では51人が亡くなりました。

今回の豪雨では、平年降水量の少ない地域で被害が大きかった印象があります。倉敷市の年間降水量は1028.6mmで、延岡の45%しかありません。降水量の多い地域ではそれだけ長く洪水と闘ってきた歴史があり、堤防などの水防施設が充実しているということでしょう。

事実、当会が一昨年視察した長良川の流れる岐阜県の下呂市では1時間108mm、美濃市では同83mmという猛烈な雨が降り、郡山市では48時間雨量が全国4位の683mmに達しました。それでも死者は岐阜県内で1人とどまりました。亡くなった方は、車が用水路に転落したとのことです。

視察した際、長良橋には、普段は通行のために開けていて出水時に閉める「陸閘(りっこう)」という大規模な水防施設があることを学びました。下の写真は、視察の時にもらったパンフレットの一部です。西日本豪雨では、この陸閘を14年ぶりに閉めたというニュースが流れていました。長良川の畳堤があるのは、そのすぐ下流です。ちなみに、岐阜市の年間降水量は1827.5mmで、延岡市の80%です。



真備町では、足腰が悪くて2階や屋根に逃げられなかった高齢者が多く亡くなったそうです。地球温暖化で豪雨の発生が頻繁になっており、延岡もこれまでの記録を超える雨にいつ襲われるか分かりません。その時、畳堤によって高い防災意識が培われていたからこそ、的確に早めの避難ができたのだ、と言われるようにしたいものです。